

町村週報

(町村の購読料は会費)
の中に含まれております)

3032号

毎週月曜日発行

発行所 全国町村会 〒100-0014 東京都千代田区永田町1丁目11番35号：電話03-3581-0486 FAX03-3580-5955

発行人 武居丈二：定価1部40円・年間1,500円(税、送料含む) 振替口座00110-8-47697

<http://www.zck.or.jp>



日本一長い籠段飾り (静岡県東伊豆町)

もくじ

随	情	情	活
想	報	報	動
川井選手の快挙に沸いた津幡町………石川県津幡町長 矢田 富郎…(12)	町村ご当地キャラじまん………(9)	住宅の耐震診断「実施していない」が5割Ⅱ防災に関する世論調査………(6)	都市・農村共生社会創造シンポジウム in 宮城を開催………(2)

写真キャプション

「籠のつるし飾りまつり」における見所の一つ、素盞鳴(すさのお)神社の籠段飾り。籠段数118段は伊東市・佛現寺の籠飾りと並んで屋外日本一。階段の下から見上げると、そびえ立つような庄巻の景観が広がる。

コラム

長生きと平穏死

東京大学名誉教授

大森

彌

日本人の平均寿命は、国が統計を取り始めた1947年は男性50・06歳、女性53・96歳であったが、右肩上がり伸び続け、2016年には男性80・98歳、女性87・14歳になっている。厚生省が2017年9月15日に発表した100歳以上の高齢者は全国に6万7、824人で、その大半は女性で、5万9、627人と87・9%を占めている。いまや人生80年、90年が当たり前になった。

しかし、長生きが「めでたい」といえるかどうか別問題である。作家の佐藤愛子さんの『九十歳。何がめでたい』(2016年、小学館)は2017年にミリオンセラーになったが、そこでは「ああ、長生きすること、は、全く面倒くさいことだ。耳だけじゃない。眼も悪い。終始、涙が滲み出て自尻目頭のジクジクが止まらない。膝から時々力が抜けてよろめく。脳ミソも減ってきた。そのうち歯も抜けるだろう。なのに私はまだ生きています」と嘆いている。

健康でありたいと切望していても寄る年波には勝てない。老いて、足腰などが弱り、癌を患い、あるいは認知症を発症し、不安と苦痛の終末期を送っている人は少なくない。それでも、事故死や「自死(自殺)」でなければ寿命が尽きるまで生き続ける。今、その最期

の生き方、すなわち死に方が問われている。人生の終末期のあり方をめぐり、医療現場などで「望ましい最期」を模索する動きが起きている。人工呼吸器や胃ろうなどの延命措置がかえって患者を苦しめ、患者の尊厳を損なうことがあると考えられるようになったからである。基本的には本人の意思決定を支援し尊重するケアを提供しようという考えである。

医療や介護のサービス現場では、本人の「生の質」(Quality of Life)の確保が大切と言われてきたが、死期が迫った時には、自宅でも施設でも「死の質」(Quality of Death/Dying)の実現こそが大切ではないかというのである。

死への怖れ、別れの寂しき、残される家族への心配などを取り除き、安らかに死を迎えることができる。そういう生の終わり方である。長命時代においてこそ平穏のうちに看取り、看取られる最期が望ましいといえるかも知れない。それを可能にするためには、すべての高齢者が生前に発効する遺言状を作成し、病床でも自分の意思を周辺の人に伝えておく必要がある。これを全国の地域において当たり前の人生作法としたいものだと思う。

全国町村会

都市・農村共生社会創造
シンポジウムin宮城を開催

「農業がつなぐ人と地域の未来」がテーマ

全国町村会と一般財団法人地域活性化センターは、2月9日、宮城県内で「都市・農村共生社会創造シンポジウムin宮城」が農業がつなぐ人と地域の未来」を開催した。当日は全国各地から約250名が参加、登壇者の議論に耳を傾けた。

主催者代表挨拶

シンポジウムでははじめに、主催者を代表して宮城県町村会長の村上英人蔵王町長が挨拶に立った。村上会長は、人口減少や都市への人口集中など、農村が直面する厳しい状況について言及しつつも、農業と農村をつなぐ積極的な活動を行う人々が増えてきていることなど、明るい話題も多いと述べた。また、地域づくりの根幹となる農業は町村行政においても重要な産業であると指摘。都市との交流を模索することは「時代

の要請」であり、農村の未来を掲げる契機として、今回のシンポジウムの盛況を願った。



宮城県町村会長・蔵王町長
村上英人氏

基調講演

次に福島大学教授・東京大学名誉教授の生源寺眞一氏が登壇し、「農業・農村政策を再考する」と題して基調講演を行った。生源寺氏は食料自給率や飲食費支出、食品産業における就業人口の変化をたどりながら、農業を含む食の産業は地域密着



福島大学教授・東京大学名誉教授
生源寺眞一氏

型の雇用機会の提供を通じて社会の安定に貢献するものであり、次代の日本社会を支える基盤になりうることを指摘した。続けて、食の産業を支える農業・農村における新たな傾向を紹介。今後重要になるのは、①面積や品目を増やして農業経営の厚みを増すこと、②食事の提供や農産物の加工・販売により顧客のニーズをとらえる判断力・構想力を養うこと、③生産工程を含めた情報の発信を巧みに行うことであると述べた。また、最近の変化として、農業が「選ばれて就く」産業になってきたことや、農業の経営形態の多様化、年配者の新規就農の増加とそれがもたらす効果について紹介した。加えて、生源寺氏は都市から農村へ比較的容易に移動できる日本の環境が、農産物直売所の盛況や農耕景観などの価値に高い関心が寄せられる風潮を生み出すとともに、自然とのつながりの維持に寄与し、人間の本能的な能力の劣化を防止しているのではないかと述べた。

さらに、テーマである農政の基本課題は、農地を引き受ける農業者の確保と持続的な耕作を支えていくことであるとした上で、その解決には安定した農業政策が必要だと述べた。一方で制度・施策の変更を繰り

活 動



返す近年の農政が農家や市町村職員などにとって大きなリスク要因となっていることを、農業所得や農地集積に関する政策を例に指摘した。また、農村の課題として農業インフラの継承を挙げ、そのインフラを支えるコミュニティの共同行動のもとで、農村が獲得してきた共助・共存の仕組みについて言及した。これまで昔からの決まりごとによって維持

されてきたその仕組みを、今後は構成員相互の納得の上で参加する共同行動としていくことで、内部からの革新や外部からの新しい血液の導入につながることを述べ、「解がないのではなく、ケースによって解が違う問題に私たちは取り組んでいる。本日の話が、今後、農業・農村政策を行っていくにあたってのヒントとなれば嬉しく思う」と結んだ。

パネルディスカッション

引き続き「農業がつなぐ人と地域の未来」をテーマにパネルディスカッションを行った。コーディネーターに宮城大学教授の三石誠司氏、コメンテーターにローカル・ジャーナリストの田中輝美氏を迎え、3名のパネリスト・伊勢崎まゆみ氏、目黒浩敬氏、林剛平氏が移住の経験談や移住先での暮らしを紹介し、会場からの質問に答えながら人・地域・未来を「つなぐ」ことについて議論を掘り下げた。

伊勢崎まゆみ氏は、横浜出身で岩手県遠野市に移住して12年になる。服飾デザイナーとして東京で働いていたところ、興味本位で訪れた遠野で見た自然の美しさや人々のもつ価値観に惹かれた。東京に住みながら月の半分を遠野で暮らす二地域居住を経て移住を決意し、現地で結婚。現在は夫とともにコメなどを自然栽培する「風土農園」を営んでいる。循環型の暮らしを理想とし、地域づくりに関わるとともに、農家民宿など外から来た人とつながる活動にも積極的に取り組んでいる、などと話した。

目黒浩敬氏は、耕作放棄地や廃校を利用して宮城県川崎町でブドウ栽培とワイナリーを営んでいる。仙台

市内でイタリアンレストランを経営していたが、食や地元の食材に興味をもってもらうという開店当初の目的を達成するには、レストランよりもよい形があるという思いから現在のブドウ栽培を始めた。自身の活動に共感し、移住してくる仲間も増えてきており、今後も様々なジャンルの人々がつながる場をつくっていきたいなどと話した。

林剛平氏は、東日本大震災の原発事故による放射能汚染の調査研究を行うため東北へ移住した生態学の研究者であり、福島県大玉村を拠点とする歓藍社の創設者の一人でもある。歓藍社は農業や建築など暮らしにまつわる様々な専門家の集まり。月に1回メンバーが日本各地から大玉村に集まり、村内の休耕地で藍の栽培と染料づくり、藍染を実践しながら、震災後の東北における、ものづくりと生活の創出を模索している、などと話した。

パネリスト3名が自己紹介を兼ねたプレゼンテーションを終えたところで、田中氏からコメントがあった。田中氏は3名の話の話を聞いて、2つの時代の変化が反映されたものだったとまとめた。一つは都市に住む若者が地方に向けるまなざしが変わり、自由すぎる個人社会の中で「つなが

活 動

宮城大学教授



コーディネーター

三石誠司氏

り(しがらみ)を欲し、故郷を求める傾向にあること。もう一つは、農業に対する認識が、従来のきついイメージから、生きる基本を支える価値のある分野というように変わってきたことである、と話した。ディスカッションで話題の一つに

ローカル・ジャーナリスト



コメンテーター

田中輝美氏

挙げたのは、パネリストの収入の話。「パネリストの話は、情緒的によく理解できるが、現実の生活を考えたときに収入面はどうしているのか。」という問いに、伊勢崎氏は「遠野に来るときはそれなりに貯金をしてきた」、目黒氏は「ブドウ栽培を

始めるにあたっては、新規就農給付金を約150万円もらったが、足りなかつたので他の仕事を掛け持ちした。結局、給付金よりも仕事での収入が多くなり、給付金をもらうことをやめた。今はワイン生産が軌道に乗り、お金に困ってはいない。」と答えた。また、目黒氏は、東日本大震災の被災地で炊き出しをした際は、あえて有償にした。無償だと次の材料費が賄えないためだ。コーディネーターの三石氏は、目黒氏のもつその視点は活動の継続性を保つ上で極めて重要だと指摘した。

地域の持続性については、伊勢崎氏が持続可能で循環型の遠野の将来構想を描いている。その構想を描いた地図を見て、伊勢崎氏は「最初は土地を増やして自分たちのお金を増や

すことを考えたが、夫が「自分の住んでいる町が潤えば人が増え、地域の人が力をつければ作物が売れるなどして地域が盛り上がり、結果として自分たちに返ってくる」と言っており、今はその考えに賛同している。」と語った。今後、農家民宿を運営していく上では料理に気をつけ、体によいものや伝統食を自分なりにアレンジして出したいと伊勢崎氏は語る。季節を問わず地の物を使った料理を提供するため、保存の仕方などを地元のおじいちゃん、おばあちゃんから日々学んでいるという。

食の伝統文化とその継承も大事にしている伊勢崎氏だが、「地域と関わらない人についてどう思うか。」という質問には、「地域の慣習には疑問に思うものもある。地域と関わりたくないと思わせる慣習は、次の人のために変えていく必要があると思う。」と答える。同じ質問に林氏は、「自分のような新参者にはわからない、地域に住んでいる人だからこそ感じられることだと思う。」と答えた。さらに目黒氏は「人にはそれぞれ

風土農園

(山手県遠野市)

伊勢崎まゆみ氏



パネリスト

アルフィオーレ農園

(宮城県川崎町)

目黒浩敬氏



パネリスト

欽藍社

(福島県大玉村)

林 剛平氏



パネリスト

れの生き方がある。外を知っているからこそ、その地域の魅力がわかるという面があると思う。その魅力が地域から出たことのない人にも伝われば、その人たちも自然と地域活動

活 動



に参加してくれるようになると思う。自分がいなくなっても継続していけるような活動にしていきたい。」と語った。3名の発言を受けて田中氏は「あるべき論を主張しても人は動かない。楽しいことをすることで人の参加を促してもよいのではないが。多様化した価値観に対していろいろな『関わりしろ』があった方がよいと思う。」とコメントした。

の1つ。自分がしっかりと実績をつくることで行政の人も動きやすくなると思うので、その点は気をつけている。」、林氏は「大玉村の行政とはとてもよい関係を築いている。地域おこし協力隊同士の協力・交流の場をもう少しつくってほしい。」とそれぞれ回答した。

三石氏は、生源寺氏の基調講演に登場した「食べ物を経験財（食べておいしいことに価値を置く物）から信用財（味以外の情報にも重きを置く物）になってきている。」という言葉引用しつつ、「その信用を得るためには、ただ物をつくるだけでなく、誰が、どうやってつくり、その記録がどうなっているのかなど、いろいろなことを考えていく必要がある。情報の受発信のコストが昔前とは大きく変わってきている現在において、地域の信用をどうやって高めるかがまさに町村の仕事に関わってくる。」と指摘。最後に「決まりごととは自りつくる」といふこと。これから先の将来は、決まりごとを国や県がつくるものでもない。必要だと思ふこと、楽しいと思ふことを自分たちで行い、楽しくやっていれば人が集まり、地域活性化につながり、ひいては幸福な人生につながっていく。」と総括した。

町村専用ページ「町村.com」をご覧ください

<http://www.zck.or.jp/choson/>

全国町村会では、全国の町村との連携を密にし、町村長と町村職員のみなさんの情報収集の利便性を向上させるため、町村専用ページ「町村.com」を開設しています。

「町村.com」では、全国町村会の活動状況や中央省庁などの政策情報を随時ご提供しているほか、全国の町村の先進的な取り組み事例をはじめ、各種統計資料など様々なデータも公表しています。

私どもは、「町村.com」が町村関係者にとって真に役立つホームページとなることを目指し、これからも充実をはかっていきたいと考えています。ご覧になったご感想・ご意見を、下記のメールアドレスにお寄せください。

現在の町村数	
平成28年10月10日現在	927
町	744
村	183
市	791
市町村合計	1,718

kouhou@zck.or.jp

- ・「町村.com」は、町村関係者の方だけがご利用いただける専用ページです。ご覧になる際は、所定のパスワードが必要になります。
- ・ユーザー名とパスワードは、各町村にお知らせ済み(平成18年9月27日付)ですが、お問い合わせは、全国町村会広報部(kouhou@zck.or.jp)までお願いいたします。

内閣府

住宅の耐震診断「実施していない」が5割

防災に関する世論調査

内閣府はこのたび防災に関する世論調査の結果を公表した。自然災害の被害に遭つた具体的なイメージについては、「地震」が81.0%で最も高く、地震の際は「建物の倒壊」を心配するという回答が72.8%で最も高かった。また、今回初めて行った住宅の耐震診断を実施しているかという質問には、「実施していない」と答えた人が51.5%に上った。

災害が起こった時に取るべき対応として、「自分の身は自分で守る」「自助」に重点を置く」が39.8%で、前回調査(2013年)に比べ18.1ポイント増、「地域や身近にいる人同士が助け合う」「共助」に重点を置く」は24.5%の同13.9ポイント増だった。一方、「国や地方公共団体が行う救助、支援など」「公助」に重点を置く」は6.2%の同2.1ポイント減となった。なお、都市規模別では、町村において「共助に重点をおく」と答えた者の割合が33.9%と高かった。(参考)町村では「自助に重点」34.4%、「公助に重点」4.2%。

※調査は昨年11月、全国の18歳以上の3千人に対して行った。(有効回収率)61.3%

1. 災害に関する意識について

(1) 災害被害の具体的イメージ

自然災害について、自分や家族の場合に当てはめて、災害の被害に遭つたことを具体的に想像したことがあるか聞いたところ、「地震」を挙げた者の割合が81.0%と最も高く、以下、「竜巻、突風、台風など風による災害」(44.2%)、「河川の氾濫」(27.0%)、「津波」(20.4%)などの順となっている。なお、「想像したことがない」と答えた者の割合が11.1%となっている。(複数回答、上位4項目)

(2) 災害に関して参考となる情報

自然災害に関して参考になると思う

のはどのような情報が聞いたところ、

「災害報道」を挙げた者の割合が59.1%と最も高く、以下、「国や地方公共団体などが公表している災害危険箇所を示した地図(ハザードマップなど)」「(48.2%)」、「災害対策に関する番組」(45.6%)、「過去の災害教訓」(36.2%)などの順となっている。(複数回答、上位4項目)

(3) 災害についての家族や身近な人との話し合い

ここ1~2年へらの間に、家族や身近な人と、災害が起きたらどうするかなどについて、話し合ったことがあるか聞いたところ、「ある」と答えた者の割合が57.7%、「ない」と答えた

た者の割合が41.7%となっている。

ア 家族や身近な人と話し合った内容
災害についての家族や身近な人との話し合いについて、「ある」と答えた者(1,062人)に、話し合った内容について聞いたところ、「避難の方法、時期、場所について」を挙げた者の割合が68.2%と最も高く、以下、「家族や親族との連絡手段について」(57.8%)、「食料・飲料水について」(55.3%)、「非常持ち出し品について」(41.7%)などの順となっている。(複数回答、上位4項目)

2. 地震対策に関する意識について

(1) 大地震が起こった場合に心配なこと

大地震が起こったとしたら、どのようなことが心配か聞いたところ、「建物の倒壊」を挙げた者の割合が72.8%と最も高く、以下、「家族の安否の確認がでなくなる」(61.3%)、「食料、飲料水、日用品の確保が困難になる」(57.3%)、「電気、水道、ガスの供給停止」(53.9%)、「家具・家電などの転倒」(50.3%)などの順となっている。(複数回答、上位5項目)

(2) 住宅の耐震診断の状況

住まいの「耐震診断」について聞いたところ、「耐震診断を実施している」とする者の割合が28.3%(内訳:「すでに耐震診断を実施しており、耐震性

情 報

を有していた」24.9%+「すでに耐震診断を実施しており、耐震性が不足していた」2.0%+「すでに耐震診断を実施したが、結果についてはわからない」1.4%、「耐震診断を実施していない」とする者の割合が51.5%（内訳：「耐震診断をしていないが、今後、実施する予定がある」3.5%+「耐震診断をしていないが、今後、実施する予定はない」17.7%+「耐震診断をしていないが、今後の実施予定はわからない」30.4%）、「わからない」と答えた者の割合が20.2%となっている。

ア 住宅の耐震改修の状況

お住まいの「耐震診断」について、「すでに耐震診断を実施しており、耐震性を有していた」、「耐震診断をしていないが、今後の実施予定はわからない」、「以外を答えた者（822人）」にお住まいの「耐震改修」についてはどうか聞いたところ、「すでに、耐震改修を実施した」と答えた者の割合が3.5%、「今後、耐震改修または建替えをする予定がある」と答えた者の割合が3.3%、「耐震改修または建替えの予定はないが、今後、実施する必要があると考えている」と答えた者の割合が10.6%、「耐震改修または建替えをするつもりはない」と答えた者の割合が37.7%、「わからない」と答えた者の割合が44.9%となっている。

(3)大地震に備えている対策

大地震が起こった場合に備えて、どのような対策をとっているか聞いたところ、「自宅建物や家財を対象とした地震保険（地震共済を含む）に加入している」を挙げた者の割合が46.1%、「食料や飲料水、日用品などを準備している」を挙げた者の割合が45.7%、「停電時に作動する足元灯や懐中電灯などを準備している」を挙げた者の割合が43.3%、「家具・家電などを固定し、転倒・落下・移動を防止している」を挙げた者の割合が40.6%、「近くの学校や公園など、避難する場所を決めている」を挙げた者の割合が38.8%などの順となっている。なお、「特に何もしていない」と答えた者の割合が10.4%となっている。（複数回答、上位5項目）

ア 家具や家電の転倒・落下・移動防止対策の状況

大地震に備えてとっている対策として、「家具・家電などを固定し、転倒・落下・移動を防止している」を挙げた者（747人）に、家具・家電などの転倒・落下・移動による被害の防止対策ほどの程度まで対策ができていないか聞いたところ、「ほぼ全ての家具・家電などの固定ができていない」と答えた者の割合が17.7%、「重畳のある家具・家電などの固定はできている」と答えた者の割合が28.9%、「重畳のある家具・家電などの半分程度の固定はできている」と答えた者の割合が20.9%、「重畳のある家具・家電などの固定はできていない理由」

9%、「重畳のある家具・家電などの一部の固定はできている」と答えた者の割合が31.7%となっている。

イ 家具や家電の転倒・落下・移動防止対策ができていない理由

大地震に備えてとっている対策として、「家具・家電などを固定し、転倒・落下・移動を防止している」を挙げなかった者（1,077人）に、家具・家電などの転倒・落下・移動防止対策ができていない理由は何か聞いたところ、「やるうと思っているが先延ばしにしてしまっているから」を挙げた者の割合が36.0%と最も高く、以下、「面倒だから」（20.3%）、「自分ではできないと思うから」（14.9%）などの順となっている。なお、「特にない」と答えた者の割合が10.1%となっている。（複数回答、上位3項目）

ウ 地震保険に加入していない理由

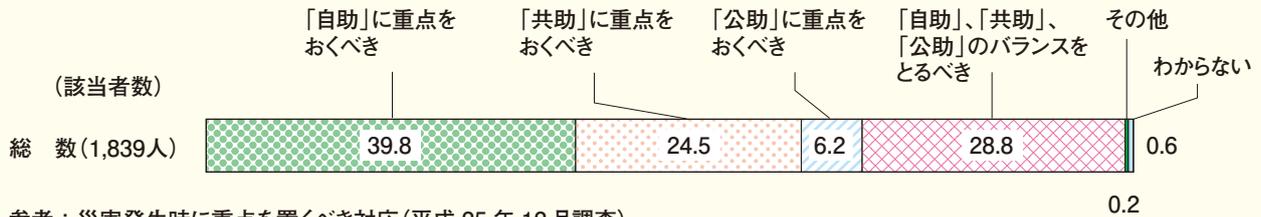
大地震に備えてとっている対策として、「自宅建物や家財を対象とした地震保険（地震共済を含む）」に加入している「を挙げなかった者（977人）」に、地震保険に加入していない理由は何か聞いたところ、「保険料が高いから」を挙げた者の割合が25.6%と最も高く、以下、「地震保険だけでは、家を再建できないと思うから」（14.1%）、「地震保険の内容がよくわからないから」（12.9%）などの順となっている。なお、「特にない」と答えた者の割合が18.6%、「わからない」と答えた者の割合が12.8%となっている。（複数回答、上位3項目）

3. 防災情報（自然災害全般）に関する意識について

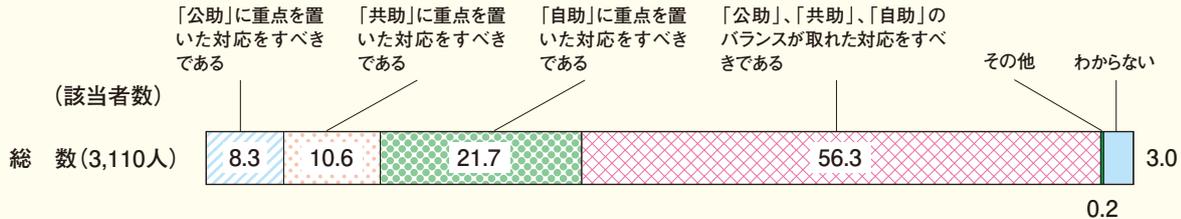
(1) 災害の危険性や災害対策について 普段から充実してほしい情報 住んでいる地域の災害の危険性や災害対策について、普段から充実してほしいと思う情報は何か聞いたところ、「災害時の避難場所・避難経路」を挙げた者の割合が47.5%と最も高く、以下、「居住地域の災害危険箇所を示した地図（ハザードマップなど）」（36.4%）、「避難勧告や避難指示など災害情報の意味や周知方法」（30.4%）、「学校や医療機関などの公共施設の耐震性」（28.1%）、「居住地域で過去に災害が発生した場所を示す地図」（27.0%）などの順となっている。なお、「特にない」と答えた者の割合が13.6%となっている。（複数回答、上位5項目）

(2) 災害が起こった時に充実してほしい情報 実際に自然災害が起こったときに、充実してほしい情報は何か聞いたところ、「家族や知人の安否」を挙げた者の割合が55.2%、「道路や交通機関の渋滞・運行状況」を挙げた者の割合が52.0%、「震度・雨量・特別警報などの情報」を挙げた者の割合が49.7%、「地域の危険箇所」を挙げた者

図 自助・共助・公助の対策に関する意識



参考：災害発生時に重点を置くべき対応(平成25年12月調査)



の割合が48・1%、「ライフラインの復旧見通し」を挙げた者の割合が47・9%、「自治体による避難勧告や避難指示など」を挙げた者の割合が47・2%、「避難場所(災害から命を守るために緊急に避難する施設・場所)」を挙げた者の割合が45・6%、「救援物資が受け取れる場所の情報など」を挙げた者の割合が45・0%、「けが人や救急患者の受入れ病院」を挙げた者の割合が44・4%などの順となっている。(複数回答、上位9項目)

4. 防災訓練等に関する意識について
(1) 防災訓練への参加・見学の経験
 国や地方公共団体、自治会などでは、毎年、地震や豪雨などを想定した防災訓練を行っているが、今までに防災訓練に参加したり見学したことはあるか聞いたところ、「参加したことがある」と答えた者の割合が40・4%、「参加したことはないが、見学したことはある」と答えた者の割合が4・0%、「訓練が行われていることは知っているが、参加したり見学したことは知らない」と答えた者の割合が30・7%、「訓練が行われていることを知らなかった」と答えた者の割合が24・0%となっている。
ア 防災訓練に参加・見学して感じたこと
 防災訓練に「参加したことがある」、「参加したことはないが、見学したことはある」と答えた者(816人)に、防災訓練に参加したり見学してみてもよいかなどを感じたか聞いたところ、「防災の大切さを知る機会となった」を挙げた者の割合が54・0%、「災害時に自ら取るべき行動について知る機会となった」を挙げた者の割合が49・8%と高く、以下、「災害時の防災組織の活動について知る機会となった」(34・9%)、「参加者が限られているので、より多くの人が参加できるようにしたい」と思った(33・8%)などの順となっている。

などの順となっている。(複数回答、上位4項目)
イ 防災訓練に参加・見学したことがない理由
 防災訓練について、「訓練が行われていることは知っていたが、参加したり見学したことはない」と答えた者(564人)に、防災訓練に参加したり見学したことがないのはなぜか聞いたところ、「時間がなかったから」を挙げた者の割合が49・5%と最も高く、以下、「具体的な日時・場所、申し込み方法がわからなかったから」(25・5%)などの順となっている。
5. 自助、共助、公助の対策に関する意識について
(1) 重点をおくべき防災対策(自助・共助・公助)
 災害が起こったときに取るべき対応として、考えに最も近いものはどれか聞いたところ、「自助」に重点をおくべき」と答えた者の割合が39・8%、「共助」に重点をおくべき」と答えた者の割合が24・5%、「公助」に重点をおくべき」と答えた者の割合が6・2%、「自助」、「共助」、「公助」のバランスをとるべき」と答えた者の割合が28・8%、以下、「自助」(47・9%)、「新聞」(32・6%)、「防災情報」(30・5%)などの順となっている。

町村

ご当地キャラじまん

Vol.33

特産品だけじゃない！

文化・歴史を身にまとして観光大使！！

ご当地自慢の美味しいものや伝統行事を身にまとい、
体を張ってPRしているご当地キャラたちを紹介するコーナーです。
今回は、東ブロック（北海道・東北・関東）からピックアップ。

東ブロック

2014年7月21日「海の日」生まれ。強風で飛ばされた時、町のまぐろ漁師が発見、保護された際に食べさせてもらったまぐろに魅了され、町のPR活動を始めた。得意技は、くちばし攻撃



大間町イメージキャラクター

かもまーる

青森県大間町

町の鳥「かもめ」にスペイン語で海を意味する「mar(マール)」をつけて「かもまーる」と名付けられた公式キャラクター。かもめをモチーフに、日本の灯台50選に選ばれた「大間埼灯台」を頭に寄せ、特産品の「大間のまぐろ」をお腹にくっつけて町をPR。毎年8月の「大間町ブルーマリンフェスティバル」、10月に開催の「大間マグロ感謝祭」、11月の「大間町産業祭」には、欠かさず駆けつけ、町民や観光客との交流を大切にしていきます。ほかに、町内外のさまざまなイベントに積極的に参加しては、特産品販売のお手伝いなどで大活躍しているため、どこに行っても人気者。大好物の「大間のまぐろ」や大間町をもっともっとたくさんの人に知ってもらいために、元気に明るく活動しています。

川崎町観光PRキャラクター チヨコレもん

宮城県川崎町

伊達政宗の家臣で、川崎町出身の偉人・支倉常長をモチーフに2014年に誕生したキャラクター。支倉常長が日本人で初めてチヨコレートを口にした人物と言いつたことからは、「チヨコレート」の「チヨコ」と常長の本名「支倉六右衛門常長」の「衛門」を組み合わせたのが名前の由来。頭にはちよんまげをあしらひ、常長と同じくローマで洗礼を受けていることから宣教師風の服を身に付けています。主に町内や仙台市のイベントに参加していて、語尾に「…チヨコ」とつけて話すおちゃめな感じが人気の秘訣。町特産のチヨコレート菓子「初コリアタ」の美味しさをアピールすることを使命としながら、町全体の観光PRにも一生懸命取り組んでいます。



年齢は404歳のほんとうに性格だが、内に秘めた闘志をむき出しにする。ヘムを弾くのが得意。耳の下に入れて一緒に写真を撮ると幸せになる。

5月17日生まれ。永遠の22歳。誕生花は「じゃがいも」。穏やかな性格で明るく元気な反面、恥ずかしがり屋でちよっぴりトジ。趣味は、畑仕事と草むしり。インシヤさん、長雨が苦手



檜原村イメージキャラクター

ひのじゃがくん

東京都檜原村

檜原村の特産品「じゃがいも」をモチーフに、1991年にイラストとして誕生し、2013年に着ぐるみ化された村の公式キャラクター。実は、ご当地キャラの中でも古株ではありますが、ツイッターやフェイスブックなどのSNSを駆使して情報を発信するイマドキ男子。役場の職員として、時には窓口業務もこなす働き者でもあります。いつでも畑仕事ができそうな緑のキャップにオーバーオールのでたと、語尾に「…じゃが」とつけるのがかわいいと評判です。生誕20周年記念に村の製材所で生じた端材で作ったキーホルダーやストラップ、ひのじゃがくんのパッケージに入った「ひのじゃがクッキー」など、グッズも販売。村内のイベントにも参加して、じゃがいもだけじゃない檜原村の魅力を全力でPRしています。

次回は、中ブロック（北信・東海・近畿）からご紹介します

情報

暮らしの点
視

日本の三大鍾乳洞

フリーライター 永浜 敬子

昔むかし、海であった日本列島は

石灰石の宝庫。鍾乳洞は石灰石の地層が水によって浸食されてできた洞窟だ。鍾乳洞というと夏の観光のイメージがあるが、気温が20度前後のところが多い鍾乳洞は、冬は外より温度が高いため、人の少ない寒い時期に行くことをお勧めする。水に溶けた石灰がつまり状になっていたり、リムストーンプールと呼ばれる棚田のような形状に連なるなど、全

国には様々なタイプの鍾乳洞がある。

なかでも規模が大きいものが日本三大鍾乳洞と呼ばれている。それは岩手県の龍泉洞、高知県の龍河洞、山口県の秋芳洞だ。

龍泉洞は、岩手県下閉伊郡岩泉町にある鍾乳洞。岩泉湧窟とも言う。この魅力はなんととっても地底湖。「ドラゴンブルー」と呼ばれる目の覚めるような青は、どこまでが底なのか分からないくらい澄み切っ



▶龍泉洞地底湖での特別イベント「龍泉洞ナイトケイブ」(写真提供:岩泉町)



▶秋芳洞洞内にある段丘の中腹から流れる水が波紋の形に固まった「百枚皿」

た美しさ。ずっと見つめていたいほど神秘的な色だ。龍泉洞まで行ったときは、約15km離れた日本最大規模の滝状鍾乳石のある安家洞あつかどうもお勧め。日本最長・最古の鍾乳洞といわれているものの全容が明らかになっていないところもロマンがある。

龍河洞は、四国中部(高知県東部の香美市)に存在する鍾乳洞。洞内より数十点の弥生土器、炉跡、木炭や獣骨などが発見されており、約2000年前、弥生時代に洞内に人が居住した痕跡がのこることから国の天然記念物指定と国の史跡にも指定されている。考古学的にも貴重な当時の弥生土器が、鍾乳石に取り込まれている様を見ることができののも魅力。

秋芳洞は、山口県美祢市東部、秋吉台の地下100〜200mにある鍾乳洞で特別天然記念物に指定されている。特徴は空間の広さ。洞内の最も幅の広いところが200m、高いところは80mに達する広さは圧巻だ。一般公開されているのは、約1kmだが、総延長は10・3km、総延長23kmの安家洞、10・5kmの鹿児島県の大山水鏡洞に次いで日本第3位の長さも誇っている。

ロマンと冒険気分が満喫できる鍾乳洞を訪ねてみてはいかが。

季節のコラム

●ところ変わればひなあられも変わる

ひなあられが地方によって全く別物だということを存じだろうか。関東の主流は餅米をボン菓子のようにはせさせ、砂糖で味付けしたもの。

これに対し、関西は小さく切った餅を揚げたおかきで、味はしょうゆ味、塩味、甘いものとさまざまある。

関東・関西と区切ったが、実際はどちらが主流かは県によって異なる。ほかにも名古屋の甘い円柱状のものをはじめ、マヨネーズ味、チョコレート味など、独特なひなあられが各地にあるそう。

●春は三日の晴れなし

三月と聞くとボカボカ陽気を連想するもの。しかし現実には雨が多く、晴天の日はその続かない。それが「春は三日の晴れなし」ということわざが生まれたゆえん。

イギリスにも「三月はライオンのごとく来て、子羊のごとく去る」ということわざがある。月の初めは荒々しい天候だが、しだいに穏やかになって月が終わるという意味だ。

季節の変わり目は体調も崩しやすいので注意を。「暑さ寒さも彼岸まで」本格的な春の到来までもう少しだ。

情 報

第47回 『都市問題』 公開講座

「地域をゆたかにする文化の力」

(公財)後藤・安田記念東京都市研究所(旧・東京市政調査会)

『都市問題』公開講座は、公益財団法人後藤・安田記念東京都市研究所(旧・財団法人東京市政調査会)の発行する月刊誌『都市問題』の特集などから時宜に合ったテーマを選び開催しています。

第47回は次のような趣旨により、「地域をゆたかにする文化の力」をテーマとして開催いたします。多数の方々のご参加をお待ちしております。

開催趣旨

祭り、民俗芸能、工芸・芸術、街並みなどに代表される地域文化は、その地域の「貌」を作り上げるものである。それは地域の個性・唯一性を生み出すものであり、そこに住まい、時にその担い手となる人々の活力と地域への愛着を醸成するものでもある。また、有形無形の地域文化を目指し、地域の外から人々が訪ねてくることも珍しくない。このように考えるならば、地域文化を守り・興すことが、その地域を守り・興すことにつながると思えないだろうか。本講座では、地域文化を継承・創造し、人口減少や少子高齢化、経済活動の低迷などに悩む地域を変えてゆくその道筋について考える。

日 程

2018年4月14日(土)
13:30~16:30(開場13:00)
日本プレスセンター 10階ホール
(東京都千代田区内幸町2-2-1)

出演者

〈基調講演〉
佐藤 一子氏 (東京大学名誉教授)
〈パネルディスカッション〉
小岩秀太郎氏 ((公社)全日本郷土芸能協会理事・事務局次長)
平田 大一氏 (沖縄文化芸術振興アドバイザー/演出家)
渡辺 靖氏 (慶應義塾大学SFC教授)
小島多恵子氏 (サントリー文化財団上席研究員) / 同会々
〔参加費〕 無料
〔参加申込み〕

後藤・安田記念東京都市研究所ホームページ (http://www.timr.or.jp) からお申込みください。
〔申込み期限〕
2018年4月12日(木)

※満席となりしだい受付を終了しますので、お早めにお申込みください。
〔問合せ先〕
後藤・安田記念東京都市研究所

TEL: 03-3591-1123
FAX: 03-3591-1209

車両共済(保険)のご案内 (一般自動車保険の車両保険)

この車両共済(保険)は、町村生協の自動車共済で補償する対人賠償、対物賠償、限定搭乗者傷害等に加え「ご自身のおクルマの補償(車両保険)」を追加する制度です。お車が衝突した場合や台風・いたずら・盗難など偶然な事故で損害を被ったときに、共済(保険)金をお支払いします。

町村生協の自動車共済にご加入の皆さまなら!

- 無事故による割引で新規から **43%(保険料)割引**
・ご加入を希望するお車が町村生協の自動車共済で過去3年無事故の場合は、ノンフリート等級9等級からスタートします。
- 集団扱年一括払による割引でさらに **5%割引**
保険料分割払(12回)も選択可能です。
・保険料分割払をご利用の場合は上記の集団扱年一括払の5%割引の適用はありません。

このご案内は概要を説明したものです。詳しい内容については取扱代理店(千里)までお問い合わせください。

※この車両共済(保険)をご契約いただける方は、全国町村職員生活協同組合の自動車共済に加入されている方に限ります。

●お見積りのご請求・お申込み・お問い合わせなどは、下記までご連絡ください●

株式会社 千里 (取扱代理店)
〒100-0014 東京都千代田区永田町1-11-32 全国町村会館西館内
●ホームページアドレス <http://www.chisato-ag.co.jp>

TEL 0120-731-087
FAX 03-3519-7325

お電話の際には、車検証をお手元にご用意ください

(受付時間: 祝日、年末年始を除く月~金 午前9時30分~午後5時)

- 「車両共済(保険)制度」は、全国町村職員生活協同組合と損害保険ジャパン日本興亜株式会社とが集団扱契約を締結し、実施しているものです。
- 集団扱としてご契約いただけるのは、保険契約者および被保険者が損保ジャパン日本興亜の定める条件を満たす場合のみとなります。詳細については、取扱代理店(千里)までお問い合わせください。

〈車両保険引受保険会社〉 損害保険ジャパン日本興亜株式会社

随 想

川井選手の快挙に
沸いた津幡町
 つばた や た と み ろ う
 石川県津幡町長 矢田 富郎

車道金沢東ICと金沢森本IC、のと里山海道白尾ICなども近接し、恵まれた交通環境が特徴です。

町の人口は約37,000人、面積は110.59km²で、その約3分の2が自然豊かな山あいの地域となっています。北部に河合山（標高417m）と三国山（標高323m）、東部に倶利伽羅山（標高277m）や城ヶ峰などの丘陵性山地が連なり、町内には本州屈指の規模を誇る「石川県森林公園」が整備されています。町の西部は平坦地で、市街地と優良な農地、そして県内最大の潟湖である「河北潟」が広がり、「河北潟」から続く東部承水路には日本海側随一のコースとして知られる「石川県津幡漕艇競技場」があります。

さて、近年における津幡町での大きな出来事として、平成28年の夏、リオデジャネイロで開催の第31回オリンピック競技大会レスリング女子63kg級に出場した、本町出身の川井梨紗子選手が、見事「金メダル」を獲得する快挙を成し遂げたことが挙げられます。津幡町民にとりまして、かつて経験したことのない感動を味わった歴史的な夏となりました。

町では、川井選手の試合を応援す

るため、1回戦から町文化会館を会場にパブリックビューイングを行ったところ、200人を超える町民の方々が駆けつけ、リオの会場にも届こうかという大声援での応援が繰り広げられました。私も町民の方々とともに、応援をさせていただきました。川井選手は、オリンピック初出場とは思えない安定した試合運びで、見事世界の頂点に立ち、津幡町民に大きな喜びと感動を与えてくれました。

これまで、津幡町民あるいは町出身者で、オリンピックのメダルを獲得した方はなく、川井選手が初めてでした。しかもその色は金色という最高の結果を残されました。

町では、金メダルを獲得した川井選手に対し、「津幡町スポーツ栄誉賞」を贈るとともに、祝賀パレードをはじめ、記念行事を行いました。

そして1年後、再び川井選手が快挙を成し遂げました。平成29年の夏、レスリング競技の世界選手権大会がパリで行われ、川井選手が妹の川井友香子選手とともに出場いたしました。姉の梨紗子選手は、リオデジャネイロオリンピック大会から階級が変更となり、60kg級に出場しましたが、落ち着いた試合運びで、周囲の

期待に応え、見事金メダルを獲得いたしました。一方、妹の友香子選手は、63kg級に出場し、今後に期待を抱かせる8位を獲得しました。

町では、梨紗子選手に早速祝電を送り、併せて金メダル獲得を讃える懸垂幕を福祉センター前に掲げ、町民の皆様とその喜びをともにいたしました。そして後日、梨紗子選手と妹の友香子選手が揃って、津幡町役場に来られまして、その喜びの報告をしていただきました。

2年連続の2度に亘る快挙は、津幡町民に夢と希望、そして勇気と元気を与えてくれました。私自身も本当にこの快挙を喜び、元気をもらいました。

2年後の東京オリンピックでは、姉妹揃っての出場、そしてメダル獲得を期待したいと思えます。

現在、川井梨紗子選手には津幡町広報特使として、町のPRを担っていただいております。川井選手の活躍が町民の元気につながっています。私も町長として、町民の皆様の元気につながる施策を積極的に展開し、「安全安心で住んでよかったと実感できるまちづくり」をさらに進めてまいりたいと思っております。

津幡町は、石川県のほぼ中央に位置し、金沢市、かほく市、内灘町、宝達志水町、富山県高岡市、小矢部市と接しており、古くから「加賀」能登「越中」の三国を結ぶ交通の要衝として発展してきました。県都金沢市には、IRいしかわ鉄道線やJR七尾線をはじめ、国道8号や国道159号などの主要な道路から容易にアクセスできます。また、北陸自動